

二〇一一年春

山内宥巖

海はあらゆる生き物の母

海を抱く母は地

地は虚空のなかに浮かぶ球

虚空は地の母胎

地は内蔵する熱をもち

地殻は呼吸しながら休まず流れている

藻のような流れの表面に

短い時間を生きる人間が乗っている

人間は知りつくした顔をして

あらゆることを統べられるかのように

地を崩し

樹霊を焼き

地の生き物や

海の生き物を食い殺して生きている

均衡を保つことは自然の意志だが

水も消せない劫火を燃やした人間の業を

あざ笑うかのように

地は揺れ

海を隆起し

安全神話を突き崩した

人間の歴史は愚昧の累積だが

愚昧の頂点が原爆から

原発へとの発明であろう

ちいさなあわれなきものにんげんは

つなみでさらわれた

こんせきもないわがまちで

ほうしゃのうをあびながら

きえてしまったにくしんをもとめて

ひろびろとした

のぞみなきのはらさあるいている